

アンケート結果からみる学生が期待する キャリア教育について

Students' Expectation for Career Education Suggested by the Questionnaire Results

前川 明*

Akira Maekawa

1990年代後半に若年者の就職難が社会問題になり、2000年頃から、各大学は就職支援を強化することを迫られ、低学年からのキャリア教育を充実させた。各大学で、様々な取り組みが試行されたが、十分に機能しているとは言い難い。本研究では学生へどのような内容のキャリア教育を期待するかというアンケート調査の結果から、学生が期待する大学でのキャリア教育について検討していく。

キーワード：大学生、キャリアデザイン、キャリア教育、就職支援

I. はじめに

近年、大学でのキャリア教育は幅広く展開されていて、キャリア教育のプログラムを導入していない大学を探すのが難しいくらい定着したと言っても過言ではないだろう。キャリア教育が大学で実施されるようになった背景としては、1990年代後半に若年者の就職難が社会問題になり、2000年頃から、各大学は就職支援を強化することを迫られたからである。さらに、就職状況が改善された現在においても、キャリア教育は学生募集のための出口の強化策として実施され、そのことが充実した学生支援の方法のひとつとして考えられており、大学教育の中で一定の存在感を示している。

一方、それほどまでに存在感のあるキャリア教育ではあるが、就職や進路に関するプログラムがキャリア教育と捉えられることが多く、大学の教育全体を考えると範囲が非常に狭い。その狭い範囲だけで捉えると、就職や進路の結果(とりわけ就職率)は経済環境に因るところが大きく、キャリア教育の充実が必ずしも就職や進路に結びついているわけではないと言える。では、大学のキャリア教育に期待されるものは何なのか。本研究では、大学でのキャリア教育の現状を示した上で、筆者が勤務している大学で担当しているキャリア教育の授業の受講者に実施したアンケート調査の結

* 流通科学大学人間社会学部, 〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

果から、今後のキャリア教育に期待される内容を検討していく。

Ⅱ. 大学のキャリア教育の現状と課題について

1990年代後半に若年者の就職難が社会問題になり、2000年頃から、各大学は就職支援を強化することを迫られた。従来からも「就職課」として就職を支援する部署は存在したものの、卒業を控えた学生を対象とする、就職活動のやり方を支援するだけであった。内容は自己分析や企業研究や業界研究の仕方、応募書類の書き方、面接対策などが支援の中心であったが、2000年卒の大学生の有効求人倍率が1倍を下回り（0.99倍）¹⁾、就職学年だけを支援していたのでは不十分ということで、2000年～2005年頃に、多くの大学では就職課からキャリアセンターへの呼称変更がなされ、就職学年の学生だけでなく低学年向けのキャリアガイダンス（セミナー）が実施されるようになり、支援の対象が低学年にも広がっていった。また、急激な拡大であったため、プログラム内容は人材ビジネス系、教育系の企業がサービスを提供するものが中心であった。具体的には適性検査を受検し自己理解を促進する内容、低学年から卒業後の進路や人生を意識させるようなキャリアガイダンスを実施し、これまでになかった取り組みが見られるようになった。さらに、2005年頃から課外のプログラムでは受講学生が増えないため、低学年向けのキャリアガイダンスを授業化する大学が増え、各大学が競争するようにキャリア教育が広まっていった。2010年頃から、それまではキャリア関連プログラム（授業を含む）の全てをキャリアセンター（旧就職課）が担当することが多かったのだが、就職支援に特化するキャリアセンター、低学年から就職学年まで授業化されたプログラムは教務課が担当する大学が増えてきた。それに伴い、キャリア教育担当の非常勤講師や専任教員を雇い入れる大学も現れてきた。このような状況を児美川は以下のように述べている²⁾。

大学におけるキャリア支援・キャリア教育の流れには、次のような特徴が見られます。

- ① 教育プログラムの対象が、大学三年次以降ではなく、大学一年次・二年次からに拡大していること
- ② 支援の内容が、単なる「就活」支援にとどまることなく、学生の生涯にわたる生き方を見通したうえでのキャリア設計の支援へと拡大していること
- ③ 当初はキャリアセンター等が主催する、正規のキャリアカリキュラム外であっ

たこれらの講座であったこれらの教育プログラムが、しだいに正規のカリキュラム内の「キャリア教育科目」へと移行していること

また、内容的には、①社会や経済界の現実に対して学生たちの目を開きつつ、②自らの将来設計や進路希望を明確化させたうえで、③就職の際に企業側が求める基礎的な能力を身につけさせる、そして④ 上記の①～③を携えて、実際の就職活動につなげていくこと、がねらいとされていると言えます。

わずか一〇年も経たないうちに、日本の大学はすっかりと様変わりし、学生のキャリア支援・キャリア教育に相当のエネルギーと人的・物的資源を投入する教育機関になってきたのです。

上記のような状況になる背景としては就職難があり、キャリア教育やキャリア支援が急速に拡大したことが挙げられる。就職難は若者の「エンプロイアビリティ」（雇用される能力）の欠如が原因であり、それを解決するためにキャリア教育やキャリア支援が急速に拡大したため、ワークキャリアに偏った狭い内容になっている。児美川はこのことを「俗流キャリア教育」と呼び、以下の3点に系統立てられていると述べている。

- ① 「自己理解」系 自らの進路や将来の仕事を考えていく前提として、自己の能力や適性、志望などを見つめる学習
- ② 「職業理解」系 職業調べや職業人の講話、職業人へのインタビューといった学習活動
- ③ 「キャリアプラン」系 そうした職業理解を踏まえ、「就きたい職業」と「現在の自分」とをつなぐ将来設計についての学習

これらのジャンルには、一定の学習の順次性が想定されてもいる。①→②→③である。「自分をみつめ」→「目標を設定し」→「計画的に努力する」。こうした発想の背景には、アメリカを中心に発展してきた「キャリアガイダンス」の理論がある。（中略）/雇用慣行を含めて、アメリカと日本では社会制度も文化も異なる。そんな国の発想をダイレクトに持ち込んできて、うまくいくのか。

このように疑問を投げかけている³⁾。さらに児美川は情報が少ない中で「やりたいこと」や「なりたい自分」について考えさせることについて、リアリティに欠けることが多く、底が浅いと批判している⁴⁾。それでも現状のキャリア教育が変わらないのは以下の点が理由であると述べている⁵⁾。

- ① 日本社会では、いまだに「正社員モデル」への“信仰”が厚い
- ② (就職希望者の多い) 高校、そして大学は、そうした「信仰」を利用し、少子化のなかでの“生き残り”を賭けて、就職実績をめぐる学校間競争に奔走している

児美川はこのような状況から①をなくすことが②を変えることにつながるとしているが、居神は教育に関しては「市場の声」が大きいため「正社員モデル」への信仰をなくすことは困難だと指摘している。そして「市場の声」に従えば従うほど大学の教育内容は似通ったものになり、多様性が失われると警鐘を鳴らしている⁶⁾。つまり、学生をいわゆる良い会社に就職させることのできる大学が市場では評価され、そのための取り組み(就職支援やキャリア教育)を一生懸命やっている大学が消費者のニーズに応えることになる。そのため、どこの大学も同じような就職支援やキャリア教育に取り組み、それを広報して高校生を集めているのである。実際、筆者も大学教員になるまではフリーランスのキャリアコンサルタントとして、これまで複数の大学でキャリア教育の授業や就職支援プログラムを担当してきたが、細かい部分については大学ごとに内容に違いはあったが、大きな幹になる部分については同じような内容で実施してきた。このことは、構造的に大学生全員が正社員として就職することができない現在の日本の労働市場に完全に合致しているとはいえないという問題を抱えながらも、正社員として就職すること、更に言うと世間が評価する有名企業や大企業に就職するという「市場の声」を無視することはできないため、似たようなキャリア教育を実施しているのが現状だと言えるだろう。

ここまで、キャリア教育の現状と課題について述べてきたが、課題があるにも関わらず大学教育の中にキャリア教育が根付いてきた現実もあり、筆者が担当しているキャリア教育科目の授業評価アンケートでも総合的にみてこの授業は満足できた(どちらかというと満足できた)学生が全体の90%を超える結果を得ており⁷⁾、何が満足につながったのかは特定できていないものの一定数の学生の期待には応えられている

と言える。

では、実際に受講している学生はキャリア教育にどのようなことを期待しているのだろうか。「市場の声」の一つである学生がキャリア教育の内容に何を期待しているのかについて、アンケートの結果から考察していく。

Ⅲ. アンケート調査による、学生がキャリア教育に期待する内容の検討

1. アンケート調査について

本章では、筆者の勤務校である流通科学大学で担当しているキャリア教育の授業の受講者に対して実施したアンケート調査に基づき、学生がキャリア教育に期待する内容の検討をしていく。

アンケートを実施した授業については次のとおりである。まず、「キャリア基礎論」では2年生以上を対象としたものでライフプラン、働き方研究の内容を中心に展開し、最後に目標設定をするという授業（表1）である。次に、「キャリア実習」では3年生を対象とした夏休みにインターンシップを経験し職業理解を深める授業（表2）である。最後に、「キャリア実践論」では3年生を対象にした就職活動の準備をするための授業（表3）である。以上の3つの授業を受講した学生にアンケート調査を実施した。

アンケートの詳細は以下の通りである。

・回答人数：287名

キャリア基礎論：189名（2年生：138名、3年生：36名、4年生：15名）

キャリア実習：41名（3年生：41名）

キャリア実践論：57名（3年生：57名）

・実施日時：キャリア基礎論：2018年7月18日（水）1・2限、7月19日（木）3限

キャリア実習：2018年9月19日（水）2限

キャリア実践論：2018年12月4日（火）2限

・アンケート内容：

キャリア教育に期待する内容は何か？

以下の項目のうち、期待する項目（数字）を選んで○をつけてください（複数回答可）

1. 自己理解が深まる内容：自分のやりたいこと、なりたい自分を考えるために過去の自分を振り返ったり、職業適性検査を受けたりして、自分のことをより理解できる内容
2. 職業理解が深まる内容：職業調べ、職業人の講話、職業人へのインタビューといった学習活動や職業体験（インターンシップも含めて）をして職業のことを理解できる内容
3. キャリアプランを考える内容：「就きたい職業」と「現在の自分」をつなぐ将来設計を考える内容（大学生活のキャリアデザインも含む）
4. コミュニケーション能力を高める内容：傾聴力を上げる、スピーチ・プレゼンテーション力を鍛えるワークやグループディスカッションを行い、社会で通用するコミュニケーション能力を高める内容
5. リメディアル教育（基礎学力向上のための内容）：社会で必要とされる小・中学校の国語や算数のやり直し、SPI などの就職試験対策などの内容
6. 資格取得のための内容：会計や IT、語学系の資格を中心にビジネスで使える資格を取得するための内容（公務員講座も含む）
7. その他（上記 1～6 以外の内容を期待する）：その他を選んだ方は下記に具体的に期待する内容を記載してください

アンケートの設問項目は多くの大学で実施される 6 つの内容を選んだ。多くの大学のキャリア教育は 1～6 の内容を組み合わせて実施すること、もしくは、いずれかの内容に特化して実施することが多い。児美川が述べているように $1 \Rightarrow 2 \Rightarrow 3$ と自分を知り、職業を知り、目標設定をするという流れでキャリアの授業を組み立てている大学が多く見られる。4 は独立して科目設定されている大学や 1～3 の内容と合わせてキャリア科目として設定されている大学が見られる。5, 6 は独立して科目設定されている大学が多くキャリア科目として設定されている大学もあれば、5 は基礎演習として低学年の必修科目として設定している大学も見られる。6 は 1～5 とは一線を画して

いることが多く、正課授業以外で実施している大学が多く見られるが、資格を取得した際に単位認定をする大学、公務員講座は単位認定科目として実施されている大学も見られるため、アンケート項目に加えた。最後に7としていずれにも当てはまらない場合を想定して、その他の項目を設定している。また、アンケートに答えた学生がどのようなキャリア教育を受講したか、以下にそれぞれの科目のシラバスを紹介しておく。

(表 1) 流通科学大学 キャリア基礎論シラバス⁸⁾

	キャリア基礎論
配当年次	2年次以上
主題と概要	受講生は変化する日本の労働市場において、多様化する大学生の進路について学ぶ。その多様化する進路を自ら選択できるように、実社会の事例を取り上げることで将来をイメージしていく。就職だけでなく人生全体を考え、自らの夢に向かうために、社会の現実と自己を照らし合わせて自分の目標を明確にし、新たな自分を創り上げていくことを目的とする。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の労働市場を知ることによって大学生の就職環境について説明することができる。 ・業界や職種などの違い、働き方（ワークスタイル）を理解し、自分の希望する仕事の絞り込みができる。 ・社会が求める人材像や能力を知ることによって将来のキャリアに向けて学生時代の目標設定ができ、その習得プロセスを計画して、充実した学生生活を過ごせる。
第1回	授業概要説明
第2回	大学生の進路
第3回	卒業後の人生設計
第4回	就職と転職
第5回	働き方研究①～企業で働く～
第6回	働き方研究②～公務員として働く～
第7回	働き方研究③～独立して働く～
第8回	職種研究①～営業・販売の仕事～
第9回	職種研究②～物を作る仕事～

第 10 回	職種研究③～管理する仕事～
第 11 回	社会人のコミュニケーション
第 12 回	社会で求められる基礎能力①
第 13 回	社会で求められる基礎能力②
第 14 回	就職活動の準備
第 15 回	まとめ

(表 2) 流通科学大学 キャリア実習シラバス⁹⁾

	キャリア実習
配当年次	3 年次以上
主 題 と 概 要	<p>受講生は、キャリア教育の一環として企業と協働した実習を行うことによって、職業観を醸成し、ビジネス・マネジメントを実感する。</p> <p>具体的には、事前研究として業界・企業・職種の研究、事前研修として規律訓練・マナー研修を行う。実習先では実践を通して仕事とは何かを実務者より学ぶ。そして、実習後は報告書を作成し、将来の就職活動につなげていく。</p>
到達目標	企業実習により、実社会において必要なビジネス・スキルの基本を身につける。また、職業への理解を深め、職業選択能力を高めるとともに、将来のキャリアビジョンを明確にする。
第 1 回	イントロダクション
第 2 回	事前研究①就職活動を見据えたインターンシップについて
第 3 回	事前研究②業界研究・企業研究
第 4 回	事前研究③営業の基本
第 5 回	事前研究④自己紹介書の説明、グループワーク準備
第 6 回	事前研究⑤企業実習計画作成（グループワーク）
第 7 回	事前研修① 規律訓練
第 8 回	事前研修② マナー研修
第 9 回	
第 10 回	企業での実習
第 11 回	
第 12 回	
第 13 回	

第 14 回	企業実習報告会（グループワーク）
第 15 回	

（表 3）流通科学大学 キャリア実践論シラバス ¹⁰⁾

	キャリア実践論
配当年次	3 年次以上
主 題 と 概 要	<p>大学生は、就職という社会への入口に不安を抱いている。学生は多種多彩なスキルを評価する就職試験にも戸惑いがある。就活はスタートラインである「何のために働くのか」という働くことの意義を自覚し、その上で社会・企業が求めている社会人基礎力を中心とした知識と能力を自ら磨いていくことが大切である。</p> <p>就活は3年生の後期から準備が始まり、4年生の前期まで続く（未決定の場合は卒業まで続くこともある）。就活対象者は自分の強さや長所を再認識し、志望理由を明確化させる必要がある。また企業が期待する求める人材像やコンピテンシーを理解し、自己成長の目標に挑戦していくことが重要となる。</p> <p>授業概要は、自分の強み・弱みを知ること（自己PR）。また、働くことの意義（価値観）、自分にとって良い会社の定義で志望動機を考えること。さらに、自己アピール力、プレゼンテーション力、会話力（面接・グループディスカッション）を高めるために、実践的な演習を交えて展開する。</p>
到達目標	<p>到達目標は、「なぜ働くのか」「あなたの強み」「あなたにとってよい会社の条件」の問いに、しっかりとした考え方を身につけることである。その上で自己PRの作成方法と会社選びの基準づくりを学び、総合的な就職力を高めていくことにある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SPI等の筆記試験対策で得意、不得意な分野を自己評価する。 ・自分の強さ・弱さの分析から自己PRをまとめる。 ・業界企業を分析し、自己PRと志望動機につなげていく。 ・就職力を高め、自分の立てた目標設定と就職戦略を策定する。
第 1 回	イントロダクション：就職環境の現状と課題
第 2 回	働くことの意味
第 3 回	社会を取り巻く環境

第 4 回	企業を取り巻く環境
第 5 回	業界研究・企業研究
第 6 回	企業研究・仕事研究
第 7 回	筆記試験（１）
第 8 回	筆記試験（２）
第 9 回	自己分析
第 10 回	エントリーシート・履歴書
第 11 回	グループディスカッション
第 12 回	面接（１）
第 13 回	面接（２）
第 14 回	就職活動の戦略の立て方
第 15 回	まとめ

2. 結果と考察

アンケートの結果と考察を以下の通り示していく。

（表 4）全体結果

	回答数	回答率
1. 自己理解が深まる内容	173	60.3%
2. 職業理解が深まる内容	161	56.1%
3. キャリアプランを考える内容	116	40.4%
4. コミュニケーション能力を高める内容	111	38.7%
5. リメディアル教育（基礎学力向上のための内容）	73	25.4%
6. 資格取得のための内容	55	19.2%
7. その他	1	0.3%

○回答人数 287 名 回答総数 690 一人あたりの回答数 2.4

（表 5）「キャリア基礎論」でのアンケート結果

	回答数	回答率
1. 自己理解が深まる内容	114	60.3%
2. 職業理解が深まる内容	102	54.0%
3. キャリアプランを考える内容	73	38.6%
4. コミュニケーション能力を高める内容	79	41.8%

5. リメディアル教育（基礎学力向上のための内容）	37	19.6%
6. 資格取得のための内容	43	22.8%
7. その他	1	0.5%

○回答人数 189 名 回答総数 449 一人あたりの回答数 2.4

（表 6）「キャリア実習」でのアンケート結果

	回答数	回答率
1. 自己理解が深まる内容	24	58.5%
2. 職業理解が深まる内容	28	68.3%
3. キャリアプランを考える内容	12	29.3%
4. コミュニケーション能力を高める内容	16	39.0%
5. リメディアル教育（基礎学力向上のための内容）	9	22.0%
6. 資格取得のための内容	6	14.6%
7. その他	0	0.0%

○回答人数 41 名 回答総数 95 一人あたりの回答数 2.3

（表 7）「キャリア実践論」でのアンケート結果

	回答数	回答率
1. 自己理解が深まる内容	35	61.4%
2. 職業理解が深まる内容	31	54.4%
3. キャリアプランを考える内容	31	54.4%
4. コミュニケーション能力を高める内容	16	28.1%
5. リメディアル教育（基礎学力向上のための内容）	27	47.4%
6. 資格取得のための内容	6	10.5%
7. その他	0	0.0%

○回答人数 57 人 回答総数 146 一人あたりの回答数 2.6

（表 4）に示した通り、アンケートの結果で一番多くの回答があったのは自己理解が深まる内容であり、6割の学生が期待する内容として挙げている。その理由は中学、高校の進路選択の際に、やりたいことを考えるように指導されている学生が多いからではないかと思われる。リクルートが 2013 年 3 月に発表した高校の教員を対象にした調査¹¹⁾の中で進路指導時に生徒に伝えることとして、「将来のことや職業のことを

考えなさい」は 98.0%、「自分のやりたいことや向いていることを探しなさい」「自分の進路なのだから自分の責任で決めなさい」もそれぞれ 95.6%、84.5%と高い数字であり、自分のやりたいことを自分で考えて決めるように指導されていることが調査からもうかがえる。筆者が担当している 2 年生前期開講のキャリア基礎論の中で、やりたいことは無理やり探さなくても良い。やりたいことが決まっていない人は自分の目指すべき方向性が決まった時に力が発揮できるように、日々の大学生活を大事に過ごすようにアドバイスをしたところ、以下のような感想が寄せられた。

- ・ やりたいことがないのなら、大学に行っても意味がないと言われて、やりたいことを決めなきゃと思っていたけど、もっと視野を広げて良いのだと思いました。
- ・ 高校まではやりたいことを探しなさいと言われてきたけど、先生がやりたいことを無理に探さなくて良いと言ってくれて、ホッとした。

これ以外にも似たような感想が寄せられ、高校までにやりたいことを考えるように指導されていることがわかる。更に大学でもやりたいこと、なりたい職業を見つけるような働きかけがなされていることが多いため、自分のことを理解しなければいけないという思いにつながり、キャリア教育に自己理解を深める内容を期待していると考えられる。しかしながら、筆者の授業内でやりたいことを無理に探さなくても良いと伝えているのにも関わらず、3 年生後期の授業であるキャリア実践論でのアンケート（表 7）でも引き続き自己理解が深まる内容を期待している学生が多いのは、就職活動が目前に迫り、自己分析を始めた学生が多いからではないかと推測する。いずれにしても、学校での指導や社会からの要請で学生たちは自分のことを理解したいと考えているのではないかと推測する。

次に回答が多かったのは職業理解が深まる内容である。全体の結果では 56.1%の学生が期待する内容として回答しており、いずれの授業においても高い数値を示している。これは先に示したシラバス（表 1～3）を確認してもらうとわかる通り、いずれの授業内容も仕事に関することが多く、授業内でも職業理解が大切であることを繰り返し伝えてきたからだと思われる。特に顕著なのがキャリア実習の受講生のアンケート（表 6）である。68.3%の学生が期待する内容として回答しており、実際に職業体験をした後のアンケートということもあり、他の授業と比較しても高い数字が出ている。一方、就職活動が近づいてきたキャリア実践論で実施したアンケートではキャリア実習と比較すると数字が低くなっている（54.4%）ことについては、次に紹介するキャリアプランを考える内容と関係があると思われ、就職という現実が近づくにつれ職業

理解だけでなく、自分の生活と職業のつながりという面に興味や関心が強くなるからではないかと推測する。

3 番目に回答が多かったのはキャリアプランを考える内容である。全体の結果では 40.4%の学生が期待する内容として回答しているが、キャリア基礎論のアンケート結果（表 4）では 38.6%、キャリア実習のアンケート結果では 29.3%と回答率は 4 番目という結果であった。一方でキャリア実践論でのアンケート結果が 54.4%と高い数値を示し、より具体的に就職先（進路）を考える時期になり、先述の通り、単に職業理解だけではなく自分の生活と職業をつなげて考える視点が強くなったのではないかと推測する。

4 番目に回答が多かったのはコミュニケーション能力を高める内容である。全体の結果では 38.7%の学生が期待する内容と回答しているが、キャリア基礎論やキャリア実習でのアンケート結果ではそれぞれ 41.8%、39.0%と回答率は 3 番目という結果であった。就職活動が近づいてきて面接やグループディスカッションというコミュニケーションをとる場面が多くなる時期のキャリア実践論でのアンケート結果が 28.1%と低くなっているのが興味深い点である。考えられることとしては、一つは就職活動の準備段階では面接やグループディスカッションを受けるわけではないため、自己分析や企業研究、筆記試験対策といった就職活動準備の内容に目が向いていることが挙げられる。二つ目はアンケート調査を実施した時期にはインターンシップに参加した学生が多く、実際にグループワークなどを体験しているため、今更、授業でコミュニケーション能力のことを学ぶより、より実践的な内容を学びたいという思いが強いのかかもしれない。いずれにしても（あるいは他の理由かもしれないが）、この点については深く検討していきたい。

5 番目に回答が多かったのはリメディアル教育（基礎学力向上のための内容）である。全体の結果では 25.4%の学生が期待する内容と回答している。キャリア基礎論やキャリア実習でのアンケート結果はそれぞれ 19.6%、22.0%と決して高いとはいえない数値を示しているが、キャリア実践論でのアンケート結果は 47.4%の学生が期待する内容と回答している。これは就職活動が直前に迫り、筆記試験の対策に迫られているからであると推測する。

6 番目に回答が多かったのは資格取得のための内容である。全体の結果では 19.2%の学生が期待する内容と回答している。この項目はリメディアル教育とは反対にキャリア基礎論でのアンケート結果は 22.8%の学生が期待する内容として回答しているが、キャリア実習でのアンケート結果は 14.6%、キャリア実践論でのアンケート結果は 10.5%と就職活動が近づくにつれて数値が下がっていくことが特徴である。これは 2

年生前期であれば、卒業までに時間の余裕があるため資格を取得して将来に役立てたいという学生がいるのだと思われるが、3年生後期の時期で就職活動が直前に迫ってくると資格を取得するより就職活動対策に取り組みたいという思いが強くなるのだろうと推測する。

最後に今回のアンケートで特筆すべき結果はその他の回答が287名中1名しかいなかったことである。これはキャリア教育に何を期待して良いのか、そもそも理解できていないから起こることだと推測する。キャリア教育について1～6の質問以外のその他を回答するだけの知識を持ち合わせていないと考えられる。そのため、キャリア実習のアンケートであったような、直前に学習したこと（企業実習）に影響を受けた結果（キャリア教育に職業理解を深める内容に期待する割合が高かった）やキャリア実践論のアンケートであったような、就職活動についてより関連の深い内容を期待する結果が出たのであると考えられる。

IV. まとめ

以上、アンケートの結果から特に次のような傾向が示された。

- ・ 期待する内容はアンケートに提示された選択肢に限定されていた。この結果からキャリア教育に何を期待して良いのか分からず、キャリア教育で提供される内容の知識を持っていないのではないかと推測される。

そのため

- ・ 回答が直前に学習した内容に影響される傾向がみられた。
- ・ 進路を真剣に考える時期（3年生の後期）に必要な迫られた内容（特に就職活動について関連のある内容）をより深く学習したいという傾向がみられた。

本研究はキャリア教育が就職活動のための内容に寄りすぎているという現状と課題を提示し、市場の声である学生へのアンケート結果から期待するキャリア教育について検討してきたが、特にキャリア実践論（3年生後期）では就職活動のための内容を期待している結果が示されたものの、全体の結果を見ると期待する内容はアンケートに提示された選択肢に限定されていたことから、キャリア教育に何を期待して良いのか分からず、キャリア教育で提供される内容の知識を持っていないのではないかと推測されることが示された。今回の結果を踏まえて、今後に取り組んでいくことを以下に示していくこととする。

まず、就職活動が近づいてくると、3. キャリアプランを考える内容を期待する学生が多くなる傾向が見られた。これは先に、必要に迫られて職業理解だけではなく自分の生活と職業をつなげて考える視点が強くなったのではないかと述べたが、見方を変えると就職活動が近づいてくることで、自分の生活と将来の職業を真剣に考え始めているとも言える。児美川はキャリア教育とは、子どもと若者の「将来への準備教育」であり、働くことだけでなく、そのためトータルな人生（ライフキャリア）への準備、人生の諸ステージでみずからが担うことになる「役割」への主体的準備をすることの支援が、キャリア教育の目的であると述べている¹²⁾。学生がキャリア教育を受講している際にトータルな人生（ライフキャリア）への準備まで意識して受講しているとは考えられないが、就職（進路決定）というイベントが近くに迫ってきた時に将来に就く仕事のことだけではなく、トータルな人生を僅かであっても意識するようになったのであれば、こちらからの働きかけによっては3年生の後期になり、その意識が顕在化する前から、トータルな人生を考えるキャリア教育を実施することが出来るのではないかと考える。そのような内容を実施することが学生の潜在的にキャリア教育に期待する内容に応えることになるため、今後の低学年のキャリア教育で取り組み、検証をしていく。

最後に、今回のアンケート結果では 7. その他の回答がほとんどなく、キャリア教育に何を期待するのか、についての回答は先述の 1～6 に限定されていたことから、学生はキャリア教育に何を期待して良いのか、多くの知識を持っていなかったことが推測でき、教員から学生に提示する教育内容によって、学生が得る知識も変わりアンケートの結果も変わる可能性があると考えられる。このことから学生がキャリア教育に期待する内容を深く理解し、教員が学生に提供するキャリア教育の内容も今まで以上に吟味する必要があると考える。そのためには、今回のアンケートのように回答を選択だけでなく、回答を選択した理由を記載してもらうなど回答内容の意図を深く理解できるようにしておく必要があったが、それが出来ていなかった点は反省点である。今後、学生がどのようなキャリア教育を期待しているのか、今回の反省を踏まえながら、更に研究を進めていく予定である。

引用文献、注

- 1) リクルートワークス研究所：第 16 回 2000 年卒大卒求人倍率
- 2) 児美川孝一郎：「若者はなぜ『就職』できなくなったのか？」（日本図書センター，2011）39-40.
- 3) 児美川孝一郎：「キャリア教育のウソ」（筑摩書房，2013）56-58.
- 4) 児美川孝一郎：「まず教育論から変えよう」（太郎次郎社エディタス，2015）206-208.
- 5) 児美川孝一郎：前掲書（筑摩書房，2013）151-154.
- 6) 居神浩：「ノンエリートのためのキャリア教育論 適応と抵抗そして承認と参加」（法律文化

社, 2015) 18-19.

7) 流通科学大学：2018 年度前期 授業改善アンケート調査結果「キャリア基礎論」「キャリア実習」

8) 流通科学大学：ホームページ 2018 年度 講義概要（シラバス）

（URL：<https://www.umds.ac.jp/faculty/sylb/18/index.html> 2018 年 11 月 25 日取得）

9) 流通科学大学：同上ホームページ

10) 流通科学大学：同上ホームページ

11) リクルート：「2012 年 進路指導・キャリア教育に関する調査 報告書」（2013 年）

12) 児美川孝一郎：前掲書（太郎次郎社エディタス, 2015）194-195.